

天乃「……暇」

おもむろに呟いて窓の外を眺めると、空が見えて、数多くの建物が見えた  
高層マンションではなく、病院

その何階何号室かも解らない一人部屋で天乃は溜め息をつく

天乃は2年間の記憶が無い。ただ失ったのではなく

事故に遭ったわけでもなく、

自らの意思のもと、行使した力の代償として失った記憶の無い2年間

それ以前にも勇者をしていた天乃は家族の記憶やそれ以外の身体機能も失っており、  
今回の記憶喪失もその影響であることは分かっていた

だから、戻ることは無いのだろう。と、半ば諦めていたし

思い出さなくても損はないと思っていた

天乃「……………」

入院して早くも数日経過しているのに

知人として来てくれるのは恋人という青年のみで

それ以外で部屋に来てくれたのは転院する前の短い間だったが

医師や看護師を除けば、同じ病院にいた犬吠埼樹という少女だけ

だから不安だった。だから恐ろしかった

自分の周りには心配してくれるような親しい友人や家族は居ないのではないか。と  
だから、戻っても寂しい記憶なら要らないと思った

天乃「……でも、あの人には悪いかな」

今もなお、記憶の無くなった障害者である自分を想ってくれている恋人らしき人

青年との出会いや告白

好きになって、好きになられた経緯

恋人になつてからの事

なにも覚えていないのは酷いかな。と天乃は苦笑する

それはとても悲しそうな、笑い声だった

そしてふと、窓に映る部屋のドアが開いていくのが見えて振り向くと、

タイミングよく件の青年が入ってきた

「おはよう」

天乃「もう、こんにちは。の時間だと思っけど？」

冗談めかしてそういうと、青年は「まだ十一時三十分だから。セーフ」と、笑う  
明確な時間が決まっているわけではない

けれど、それでもそれはもうこんにちはの時間ではないかと思いつつ、

天乃は「貴方がそう言うならそれでも良いけど」と言う

天乃はまだ、青年を恋人だとは思っていない

否、恋人だと思えていない

彼の好意を疑っているか否かではなく、純粹に心がまだ、彼に傾いていないからだ  
けれど、青年との会話は天乃にとって大切な時間で、幸せな時間になろうとしている

それは天乃の少女としての心にある寂しさや切なさによって開けられた穴を埋めることができるのは今や青年しかいないがゆえの必然だった

天乃「ねえ、どうして。今もまだこんな私を好きだって言えるの？ 貴方のこと、何一つ覚えてないのに」

「君が好きだからだ。君が僕を覚えていなくても。僕は君を知ってる。だから、僕の君を好きだという気持ちは消えないんだ」

青年は恥ずかしげもなく、言い切って笑うと

天乃の桃色の髪に隠れた純白の頬に触れる

その白さとは対照的な温かさに、青年は思わず、感嘆の息を吐く

「君が僕を覚えていないなら。僕は君を振り向かせるところから始めればいい。恋なんて。両思いじゃなければそういうものだろ？」

青年は本気だった

だからこそ、その瞳に偽りの色を感じなかった天乃は照れくさそうに、顔を赤くして手を  
払う

天乃「……私が言うのもあれかもしれないけど。頑張ってる」

「うん。頑張るよ」

青年の笑みに、ついさつき高鳴った心臓が大きく跳ね上がったのを感じて、  
天乃は胸元に手を充てがう

まだ、彼を好きだと思ふことはできていない  
しかし、大切な記憶の欠けた天乃はごく普通の少女として。今、確かに彼に魅力を感じた  
五体不満足で、記憶のない自分に無償の愛を捧げようとしてくれる姿は  
少女としてだけではなく、人としても。とても、嬉しいものだからだ

それから少しして、青年が去った部屋で少女は布団に入ったまま天井を見つめる  
何もすることがないし、たとえあつたとしても何もできない

青年のいなくなった部屋は静かで、物寂しい  
その常に現れる喪失感天乃の心に嫌な思いを蓄積させ、嫌な考えを作り出していく

青年が自分に愛想を尽かして、来なくなってしまうかもしれない  
青年が自分以外の誰かに好意を向けて、見捨てられてしまうかもしれない  
お前なんか。と、蔑まれるようになってしまいかもしれない  
彼がそういう人間ではないという微かな信頼があつても、そんな嫌な予感が増幅して、心  
を蝕む

天乃「っ……」

青年を止める権利はない

彼が他の女性が良いと言つても、彼がもう疲れたと言つても、今の自分には止められない  
見捨てられるしかないのよ。と、心の中で響き続ける煽りに耳を塞ぐ

天乃「……寂しい」

青年のいる時間が恋しい。誰かのいる温もりが欲しい  
天乃は勇者だった。誰よりも強い勇者だった  
けれど、ただの少女としては強くなかった  
誰かの為の強さしか、天乃にはなかった  
だから……天乃の頬を涙が伝っていく

天乃「私……」

匂いの無い世界。音の無い世界  
記憶の無い世界。誰もいない世界

天乃「ひとりぼっちなのね……」

ただでさえなにもない世界が真っ暗になってしまるのが嫌で  
そんな世界が恐ろしくて、目を瞑るのが怖くなった

「眠れないのかえ？」

そんな蝕まれていく少女に、何処からともなく現れた看護師は声をかける  
ただの看護師ではなく、天乃の精霊である九尾が扮した女性だが  
それに気づけないよう特殊な力行使している以上天乃にとってはただの看護師で  
九尾もまた、もうそれで良いと思っていた

「何を泣いておる」

天乃「だって……」

「今は、妾がいてやる。ゆっくり眠れ」

九尾は優しくそう言うと、  
天乃の手を握り、母親のような優しさで頬を撫でる

「妾は、いつまでも共にいることは出来ぬ」

天乃「……え？」

「すまぬ」

九尾は名残惜しむような表情で言うと  
目を見開いた天乃に首を振り、なぜ、どうして、なんで。と  
聞きたそうな天乃の口元に人差し指を押し当てる  
樹は選択を拒んだ。曖昧なままに話を終局させた

だから、九尾もまたその結果が天乃から離れる事になると分かっている、樹に課した選択を自分でも選ぶことをしなかった

天乃「い、嫌……」

看護師の中でも特に親しく、青年と同様に心の拠り所となりつつあった人それがまた、自分のもとから奪われるのを、天乃は平然と受け流すことが出来るほど強くはなくて

天乃「犬吠埼さんに会えなくなつて。貴女まで会えなくなつたら。私は……っ」

天乃の悲痛な声、弱弱しい儂げな表情

それを見つめ、魂や記憶に刻み込む九尾は痛みを感じ、苦しみを覚え、辛さを感じけれども、自分は精霊だ。勇者ではなくなつた天乃の傍に居ていい存在ではないせつかく戦わずに済むようになった目の前の少女を再び戦禍に巻き込むわけにはいかないそう考える九尾は首を横に振つて

天乃「……………」

目を見開いた天乃は、瞳に溜まつた雫を滴らせまいと目を瞑る

行かないでと、言いたい

ここにいてと、言いたい

けれど、迷惑に迷惑を重ねるつもりか。と、

心の闇に問われ囚われ、天乃は言葉を無くしてしまった

「……………」

九尾は黙り混んだ天乃の頬を撫でて頭を撫でて

その手に天乃を記憶させていく

永久の別れ。もう二度と、会うことはない

だからこそ、九尾は天乃に触れるだけでなく

その体を抱きしめた

天乃「っ」

「主の幸せを心より願う。ゆえに、少年を愛することを非難はせん」

好きに生きる。自由に生きる

出来ないことがある分、出来ることには食欲であれ、強欲であれ  
そう告げてきた看護師の優しい温もりにも包まれていた天乃はいつの間にか、静かな寝息を  
立てて眠る

それは九尾が持つ、特殊でも何でも無い、優しい抱擁ゆえの安心感によるものだ  
その寝顔を見つめ、九尾は息をつく  
一人残していくのは不安だ。心配だ  
けれど、自分にはまだやらなければならないことがある  
いつまでも名残惜しみ、解決を先延ばしにするわけには行かない  
それが分かっているからこそ、九尾は愛しい主を手放す

九尾「……主様にせめてもの手向けじや」

九尾はそう呟いて天乃の頭に触れると、特殊な条件下でのみ行使される自らの力を植え付け  
ける

必要になるかもしれないし、ならないかもしれない

これは久遠天乃の心を救うための補助装置

しかし。それもまた、九尾の独断での発動はなく

天乃があることを意識・無意識関係なく望んだ時に発動する装置

結局、九尾は自らでの選択を拒んだのだ

九尾「良き眠りを。愛しき人の子よ」

そう言い残し……九尾は姿を消した

◆数時間後

目を覚ましたときにはもう、看護師はおらず、手元には少年がくれたらしい、【勇者部】という文字が付けられたヘアゴムが置かれていた

実はどこかに隠れているかもしれない

慌てるのを楽しみにしているのかもしれない

そう思った天乃だが、残念ながら。天乃の鋭敏な感覚は人の気配をまったく察知せず

天乃「っ」

目を見開き、伏せて、歯を噛み締めた天乃はなにも言わず、なにも思わないようにと抑え込むかのようにヘアゴムを握り締めた手を自分の胸に宛がう

しかし、無機質でただの装飾品でしかないはずのそれは温かい

天乃が忘れた想い、失った願い、与えられた希望がそこにあっただからだ

それでも天乃の記憶は戻らない。ただ、我慢できるほど安くない喪失感を感じ、天乃は身を屈めて、嗚咽を溢す

天乃「う……」

友を失い、身体機能を失い、2年間を失い、犬吠埼樹を失い、親しい看護師を失う  
まるで失う事が義務みたいだと、少女は思った

天乃「あはは……っ」

そうだったら凄く良い人生だと、とても面白い人生だと。楽しく笑ったつもりなのに  
そんな気持ちには全くなれない。そんな空気にならない

当たり前だ。何が楽しい、何が良い、何が面白い。全くもって理解できない

どんなに頑張っても。どんなに貢献しても。その分自分が犠牲になっていく人生  
はじめはそれでいいと思っていた

銀のため、園子のため、須美のため。彼女たちが生きている世界を守るためなら

彼女たちの日常を、幸せを。守れるのならそれでかまわないと思っていた

けれど、その頑張りの結果が今だ

自分の身体機能が失われたことも、記憶が失われたことも

銀たちのためだというのなら受け入れることが出来た

でも、銀は居ない。園子も居ない。須美も居ない

自分以外の誰も居ない。何もない。守るために失って。結局何も守ることなんて出来なかった

天乃「会いたい……っ」

園子に、銀に、須美に。

そして、前回の病院にいた、もしかしたら自分の二年間を知っているかもしれない樹に

でも、会えない。

居なくなってしまうた看護師以外の看護師は無理だと言う。だめだという

なら自力で行くと言ったら、近くにあったはずの車椅子が無くなった

このまま何もなくなってしまうかもしれない

誰も居なくなってしまうかも知れない

天乃「嫌……やだ……っ」

その不安、その恐怖に少女は涙をこぼして頭を振る

しかし、抱きしめてくれる人は居ない。慰めてくれるものはない

天乃「私、悪いことなんてしてないのに……」

どうして奪われていくのか。どうして失っていくのか

どうして、守ったはずのものまで無くならなければいけないのか

乃木園子とは違い、天乃は振り返る過去がない

すがりつくことの出来るものがない

神として崇められ、讃えられ、重宝されることもない

だから天乃は耐えられない。傷つけられるだけ傷つけられて

ボロボロになって、介抱されることのない心を抱いて。絶望の片鱗を垣間見る



天乃「みんな……なくなっちゃう……」

中学三年生。

年齢にして十五歳。

まだ子供である天乃は孤独に苛まれ、蝕まれ、弱っていく

◆翌日

誰も来ない病室で、孤独になった少女は窓を見続ける  
ゆっくりと雲が流れ、時々鳥が横切って、太陽の光が差し込み、抜けていくそんな夕方  
自然が見せる時の姿を、天乃はただ黙って、ぼうっと見守る

何かを考えるのが嫌になった。何かを思うのが嫌になった  
どうせまた全部失う。だからもう何かを得るのが嫌だと、  
天乃が殆どを諦めなければならぬ人生の中で、  
更に多くのものを諦めることを考え始めた時、不意をつくように見えた影に顔をあげると  
青年がいた

「大丈夫？」

天乃「っ……平気」

瞳の潤いを感じた天乃は目元を拭い、強がり口にする  
けれどそれは強がりというよりも、保身だった  
これ以上傷つきたくないという。脆くなった少女の願いだった

「無理しなくていいよ。昨日はあのあと来れなくてごめん」

親しくしていたであろう看護師が去ってしまったことを聞いていた  
けれど、すぐに会いに行くことはなかった  
会いに行くべきだと思った。けれど、少し待たせるべきだとも思ってしまった  
そして、青年はそれを実行したのだ

それはとてもずるくて酷くて、悪いことだという自覚が少年にはあったのに  
すでに。自分は恋人を【騙】っている。だからもう、  
自分の存在を天乃の中でより強くしようと目論見、行動することなんて今更だと思っ  
てしまったから

だから少年は悪意なき悪意、善意なき善意を黙認する  
はるかに遠く、高き華であった少女の弱った心に付け入ること  
真実を告げて救うのではなく、偽りによつての救いとする事

それを決意し、青年は口を開く

「僕がいるよ。僕が、君のそばに。天乃のそばにずっと居る」

天乃「っ……」

「嘘じゃない。君が望むなら、僕もここで生活してもいい」

天乃「なんで……っ」

なんで貴方なの。と、天乃は思ってしまった

青年のことを天乃は嫌いではない。けれど、何かは青年以外の誰かを求めているだから、青年の言葉を喜びたいのに喜べなくて

天乃は抱きしめようとしてきた青年の体に手をつき、距離を残した

天乃「ごめんなさい」

「謝ることなんて」

天乃「もう少し考えさせて。あとちょっとだけ。お願い」

それが、天乃ができる精一杯の答えだった

青年までいなくなってしまうのは嫌だ。けれど、本当に彼でいいのか

自分が何もかも委ねる相手が、本当に。この人で良いのか

天乃には考える時間が必要だった

その気持ちを察してか、青年は天乃から少し離れて椅子に座ると

理解った。と、答える

記憶を失って独りになり、看護師まで失って、心が傷ついて、弱って、迷っている。

そんな状況の天乃にはきつと、

無理強いをしたり、もう、君には会いに来ない。と言うような脅し文句を使えば簡単に自分の手中に収めることが出来るだろう。と

青年は思っていたし、事実。その心に漬け込んでいる最中だ

でも、脅したりして作られる関係はただの主従関係のようなものでしかないと、青年は拒絶した

青年は本当に。本気で、自分のすべてを持って。久遠天乃という少女を愛している  
だから、青年は嘘という罪で、心に付け入るといふ悪で、天乃に寄り添う  
そうしなければ、それがなければ。青年は天乃の傍らに居ることなんて出来ないからだ

「僕がここに居ても考えられないだろうから、また明日来るよ」

天乃「あっ……っ」

「？」

天乃「っ……うん、また明日。本当に、ごめんなさい」

落ち込む天乃に対して、青年は笑顔と共に「絶対くるよ」と、言って去っていく  
天乃が悩んでいる。苦しんでいる

それが自分のことについて考えているからだと言うことが、青年は不謹慎だと思いつつ  
酷いことをしているとと言う罪悪感を抱きながらも、うれしく思ってしまった

それは、本来なら天乃が青年との関係について考えることはなく  
自分の存在が天乃に影響を与えていると言うこと事態が、青年にとっては願っても叶うは  
ずのないものだったからだ

青年が去って行った後、仲が良かったのは別の看護師が部屋に入ってきた  
と言うのも、就寝前に念のためオムツの交換をするためだ  
昼間などは呼べば連れて行ってもらえるが、夜ともなればそうは行かない  
それゆえの対策であり、オムツと併せて下着を着用すると二度手間になったりもするため  
今はもうそれを下着の代用品にされている  
そこに少し不満はあるが……世話になる身。言える筈がなかった

「彼、毎日来ていますね」

天乃「え？」

「ほら。久遠さんの自称彼氏さん。本当に恋人じゃないんですか？」

天乃「どうなのかしら……思い出せなくて」

天乃はおムツを取り替える看護師に困った笑みを返す  
恋人か恋人じゃないか。思い出せたら良いのにと思う反面  
恋人じゃなかったらどうしよう。という不安もあるからだ

もしも恋人ではなかったら、青年は嘘をついている。騙しているということになって  
そして、そうになったらもう……天乃には何も無くなってしまふ

「あの子、優しくて明るくて。顔はイケメンってレベルじゃないけど。格好いいよね」

天乃「性格はそう思うけど……顔はちよつと。比較出来るほど鮮明な男の子の記憶ないか  
ら分からないわ」

天乃が同年代や青年に近い年齢の異性を見たのはもう二年も前で

そのときは勇者としてのお役目もあり、異性についてなんて考えることは出来なかった

だから、比較できるほど鮮明な記憶はないのだ

その返答にしまった。と思ったのか、看護師はぼつが悪そうな顔ですみません。と言うと  
すぐに笑ってごまかして話を続けた

「もしも、あの子が久遠さんの恋人じゃないなら。私。立候補しちゃうかな」

天乃「立候補……？」

「うん。あの子の彼女。優しいし顔も良い。それでフリーだったら狙い目だよねっ」

天乃「えっ……」

この看護師としては軽い冗談だったかもしれない  
けれど、天乃にとっては冗談にならないことだった

自分との強い関わりがあるかもしれない唯一の人

他人ばかりの中で、ただ一人知り合いである可能性のある青年

その彼女になりたいという人が現れて、天乃は本気で考えた

青年と自分が自称ではなく、ちゃんとした恋人になった結果と

青年と目の前の看護師が恋人になった結果。そして、天乃は思う

(……私なんかよりは、彼も幸せになれるかな)

それはほんの数分足らずでも、考えに考えたこと

それはずっと、考えてきたこと

どちらがより青年を幸せに出来るのかなんて、考えるまでもないこと

天乃「うん、私は良いと思う」

「え？」

天乃「今、貴女にして貰っているように私は介護が必要な」

このまま治ることがなければずっと、永遠にだ

今はまだ汚れていないオムツを一日経過と言うことで新品に換えるだけだが

これがもしも汚れていたら。もし、それを彼が換えなければいけない状況になったら

そう考えると、青年に対する申し訳なさが溢れて来る

天乃「こんな私を好きって言うてくれるのは嬉しいけど。でも……」

「……久遠さん」

天乃「デートだつてきつと大変だし、制限されるし。貴女と付き合えるのなら。その方が  
良い」

少女の切なげな表情に、看護師はその後の言葉を見つけられずに黙り込む

自分が不自由だから。そのせいで、彼までも不自由になってしまいうから

だから、自由になれるなら自分以外の人との交際もいいと思う

そんな思考回路を持った15歳に、看護師は首を振る

「振られますよ。私」

天乃「どうして？」

「決まっています。あの子が好きなのは久遠さんだからですよ」

毎日お見舞いに来て、それをまったく苦に思っていない表情

たくさんの患者を診てきた分、たくさんの関係者を見てきたからこそ、

看護師は自分が思う少年像は勘違いではないと思っていた

青年は少女が好きで、大好きで。本当に愛している

たとえ少女の記憶がなくて、体が不自由で介護が必要なのだとしても

関係をまた「からやり直さなければいけないのだとしても……通い詰めてくれるほどに

「羨ましいですよ。私、恋人できたことないんで」

天乃「そうなの？」

「はい。それに出来たとしてもあんなに好きになってくれるなんて。多分。難しいですね」

自分が天乃と同じ状況になったときのことを考えて、看護師は苦笑する

自分が相手にそこまで愛される事が出来るのかも疑問だが

それ以前に、相手がその状況になってもなお愛し続けることが出来るのかも疑問だった  
普通の好意では成し得ない強い気持ち。そこに付け入る隙などないからだ

「それに、久遠さん自身。彼のこと悪くはないって思ってますよね」

天乃「……そう見える？」

「それはもう」

もつとも、そこに関してはお見舞いに来てくれるのが青年だけ。と言うのが強く関与して  
いそうだが

看護師はそこに気づきつつも関係を崩さないようにと、あえて口を噤む

まだ中学三年生で、記憶喪失になって、体のほとんどが動かせない障害のある女の子

肉体的にはもちろん、精神的にも頼りたいのは当たり前。でも、記憶喪失のせいで親し  
い人に頼ることが出来ない

そんな中、恋人だと名乗り献身的に付き合ってくれる青年は天乃にとって唯一の心の拠り  
所になっているに違いない

それなのに、不安にさせたりするようなことは言わないべきだ

「久遠さん、私があの子の恋人に立候補しちゃおうかなって言ったとき、とても悲しそう  
な顔してました」

天乃「それは」

「もっと自信持ってください。もっと希望を持ってください。久遠さんは優しくて可愛く  
て魅力的な子ですよ」

オムツの取替えを終え、ズボンを履かせた看護師は「終わりっ」と明るいう声で言うと、  
天乃の頭を優しくなでて、笑みを浮かべる

母親になったことはない。けれど、母親に憧れるまだ若い看護師は天乃を自分の娘に見立  
てて、思う

たとえ障害があっても、自分はその娘や息子を愛することが出来るだろうか  
そんなことを考えながら、看護師は「おやすみなさい」と、部屋を出て行った

天乃「……悲しそうだったんだ」

窓に映る自分の顔はいつもと変わらない平然とした表情で

悲しそうだった。という看護師の言葉がうそのようにも見える

けれど、それはきっと今だから。あの時は悲しそうな顔になってしまっていたのかもしれない

青年を譲るといふのは少し変かもしれないが、青年との恋人と言う立場を明け渡すかどう  
かの話で悲しそうにしていたというのなら

自分はその立場を譲りたくないと思っただけでいいと言っただけではないだろうか  
いや、きっと。そういうことなんだろう。と、天乃は考えて息をつく

天乃「……まだ、【愛してる】とは言えないけど」

でも、取られたくないと思っただけ

失いたくないと思っただけ

一緒に居てほしいと思っただけ



今もおそばに居てくれている知り合いの可能性が最も高い彼を、手放したくないと思っ  
ている

でもそれは……恋ではない

(でも。あの人はそれを望んでる。私との恋愛を望んでる)

だから応えてあげなかったら捨てられるかもしれない。またしてもそう考え出している自  
分の思考回路に呆れ、

天乃は小さくため息をついて、カーテンの隙間から見える夜空を見つめる

真つ暗な闇の中、点々と小さな星の見える世界

それが幻想であると二年前に知ったが、やはり。幻想であつても綺麗だった  
いやもしかしたら、幻想だからこそ。綺麗なのかもしれない

天乃「恋愛も……そういうものなのかしら」

誰かを純粋な気持ちで好きになつたりするのが恋ではなく

寂しいからとかどうとか。何か別の嫌なことから逃れる現実逃避こそが恋なのではないか  
天乃はそう考えて、思わず笑う

だとしたら、

あの青年もまた現実逃避の幻想を捜し求め自分に辿り着いただけ  
自分に執着するのは求める幻想の形にもっとも近いからというだけ  
そんなものではないのではないだろうかと思つて

それなら自分の現実逃避の依存先として問題ないんじゃないだろうか  
共依存してしまつても良いんじゃないだろうか。考えて

天乃「ふふっ……もう、いいや」

それでいいと。天乃は諦めた

孤独である寂しさと悲しさと切なさ恐怖。それから救ってくれるのなら  
本当に恋人なのか定かではないのだとしても

誰かに奪われてしまう前に、彼と繋がってしまったほうが良い  
気持ちはきつと。後からついて来てくれるだろう

天乃「嫌なのよ……っ」

本当にそれで良いのか。と、何かに問われた気がした天乃は、  
そう言うのと同時に、涙をこぼす  
散々痛めつけられた少女はもう、限界だったからだ

◆翌日

「ほ、本当に!？」

翌日の病室に、青年の嬉しそうな声が響く  
無理も無いだろう

念願の少女との交際が可能になったのだから  
一方通行でしかないと諦めることも視野に入れなければいけなかったものが  
ついに、成就する可能性が出てきたのだから  
いや、これはもう。青年からしてみれば成就したといっても過言ではなかった

天乃「う、うん。ここまで付き合ってくれる貴方を疑いたくない。信じたいから」

「ありがとう」

天乃「ううん、私こそ。見捨てないでくれてありがとう」

天乃は心の奥底の本心を打ち明けることなく、表向きな心を打ち明けて、笑みを浮かべると

青年の嬉しそうな顔に本心からであろう幸福感を感じ、天乃は目をそらす

(嘘をついてる。騙してる。私は貴方を愛せていない)

天乃はそんな後ろめたさに痛む胸を押さえて首を振り、  
そして、それがあるからこそ。天乃は青年の思いに答え、言う

天乃「ねえ、キス。しましょう?」

以前の病院で求められたときはまだ、犬吠埼樹がいて  
彼女を恋人だと思っていたわけではないが  
青年よりも樹を信頼していた為に許せなかった唇を差し出す

心の奥底が理由の分からない悲鳴を上げてても、  
天乃は青年を見つめ、両肩を掴まれても抵抗せず

近づいてきた唇に触れ合わせ……重ねる

その感触はどこか懐かしい。けれど、記憶がないせいかそこには違和感があった  
天乃は右手を青年の体に当てると、ぐっと伸ばして距離を開く

天乃「ごめんなさい」

「いや、いいんだ」

青年は怒った様子もなく、天乃の頭に触れようとして手を引くと、  
押し殺された悲しさを感じる笑みを浮かべる

本当の恋人ではない以上、同じキスなんて出来るはずが無い  
だから違和感を覚えることに関しては仕方が無いというある種の割り切りはあった  
ゆえに、悲しいと思っただけはその拒絶に対してではなく

記憶を無くしながらも、自分ではない人にいまだ天乃の心が向いていると感じたからだ

天乃「……………」

青年が見つめる先、顔を伏せて自分の唇に触れる天乃の姿は、  
どう見ても恋人と思っっている相手とキスした様子ではなかった

しかし、青年はそれに関しては何も言わず、また来るよ。と言いついて去っていった

その夜のこと、天乃は夢を見た

自分の部屋だろうか。女の子らしい部屋で

青年と言いついながら大胆な告白をしあったことや

遊園地の観覧車で、キスをしようかどうか迷って結局しなかったこと

勇者部のみんなに唇を奪われながらも

青年にだけは……自らキスを求めてしたこと

それを利用してただだと思われて悲しかったこと

そんな、忘れてはいけないような大切な思い出の夢

天乃「……………」

夜中に目がさめた天乃は自分が泣いていることに気づいて、拭うけれど、泣き止むことはできなかった

それは彼との記憶が蘇った嬉しさではなく、底知れない悲しみゆえの涙だからだ

天乃「っ、う……ぐすっ」

でも、天乃はそれに気づかない

悲しい涙だと気づかない

その涙に本当の想いが含まれているなどとは気づかない

そして

少女の心と記憶は、九尾の残した少女のための【偽り】によって——塗り替えられていく  
いつかきつと、少女は偽りに気づくだろう

だがその時にはもう、取り返しのつく場所に少女はいない

全てを失って、一つを得た少女はまた失うことを運命づけられていた

この世界は、久遠天乃という少女に対し冷酷で冷酷で、非情で——残酷だからである